

ルプスの少女ハイジ』を題材にして地形や牧畜業へ展開する授業の実践例が提示された第5項、今日の世界各地の諸課題に直結する言語と宗教に焦点を当てた第6項、これらはいずれも分かりやすく魅力的である。節末のコラム②は環境保全や社会貢献意識の高いエシカルな消費者を育てるための教育、コラム③は世界史との関連の下で地理を扱う意義を説いており、地理が周辺領域のハブとして機能するためのヒントを拾うことができる。

第2章第2節は7つの項を含んでいる。本節の特色はたとえ扱う内容がローカルな場合(本書では千葉県)であっても、考察手順が国内他地域や諸外国でも採用できるよう配慮して書かれていることである。各々の項の内容を一瞥すると、まず第1項では千葉県を県全域および県内市町村スケールで観察した人口動態がグラフや地図で表現され、続いて国内の特徴ある地域の産業別人口の三角グラフが示されて、入試問題でよく見かけるグラフや地図の「からくり」や作り方が理解できる。第2項ではフードロスなどの今日的な食料問題を身近な場所から地球規模まで上げて国際協力へと展開する手法がまとめられる。第3項では市販のミネラルウォーター飲み比べから始まって農作物生産に要する水量(パーシャルウォーター)を考えさせる提案が面白い。また、第4項で扱われる都市圏構造や郊外の都市化の考察は、千葉県内の諸都市だけでなく、他の都道府県でも応用できる。

第2章第2節の後半では「歴史総合」や公民科との関連が深い民族問題、領土問題、南北問題が第5～7項で順に取り上げられる。第5項で扱われる民族問題では、パレスチナ問題やカーストが効果的に紹介されているが、首都圏に多い外国人労働者が抱えるハ

ラール食提供の課題なども教材として高校生に腑に落ちるかもしれない。第6項で焦点化される領土問題は、小学校社会科でも重視される事項であり、本項では北方領土問題を通じた考察を促す工夫が紹介される。同様の考察は、自衛隊駐留の是非を中学生以上の住民投票で問うた沖縄県与那国町の試みも面白い教材にできるだろう。第7項では南北問題を「貿易ゲーム」という取組で理解する試みが紹介され、経済格差を自分事として理解することの大切さを痛感できる。ここでは、フェアトレードも教材として適合するかもしれない。節末のコラム④は欧州諸国の中等教育向け地図帳で多用されるカルトグラム(数値の多寡で変形させた地図)が扱われ、地図表現の多様性を知る糸口が示される。

第3章第1節では、注目度の高い防災が自然環境との関連のもとで解説される。第1項では『防災白書』から世界各地の巨大自然災害の分布を調べる活動や防災意識の共有が語られる。津波リスクが高い日本の立場から「沈み込み帯」と津波のメカニズムが図示できれば、一層の理解促進を図れるかもしれない。第2項では、県内の山武市と銚子市のハザードマップを活用した授業実践が披露され、ハザードマップを使う際のDIG(災害想定ゲーム)の有効性が良く理解できる。第3項では、東北地方太平洋沖地震で甚大な被害を受けた釜石市のハザードマップの提示に続けて、マスメディアを賑わせた「釜石の奇跡」だけでなく、鶴住居地区で発生した知る人の少ない「釜石の悲劇」が紹介されたことは意義深い。

自然災害に関しては、令和元(2019)年の台風15号および同19号によって千葉県は甚大な被害を受けた。本書の発行日は2019年11月10日なので上記の台風被害は収録され

ていない。ただ、甚大な暴風被害をもたらした令和元年台風15号に関しては、月刊「地理」65-1に口絵を含む特集記事がまとめられており¹⁾⁻⁴⁾、豪雨被害をもたらした令和元年台風19号は池田(2019)が速報記事を同誌64-12に寄せている⁵⁾。そして上記の台風被害に関しては今後も様々な記事が公表されるだろう。これらの記事を本節と併せれば、更に厚みのある授業設計が実現できるはずだ。

第3章第2節は、第1～3項がESD(持続可能な開発のための教育)を取り上げている。切り口に若干の相違はあるものの、3つの項に共通して同図幅の新旧地形図比較が扱われる。新旧地形図の比較はESDとの親和性が高く、地域変化に対する評価を盛り込みやすいからか、最近のセンター試験や教員採用試験では出題頻度が高い。そうした観点から本節第1～3項の対象地域を改めて観察すると、江戸川の氾濫原の農地が急激に都市化した松戸市(第1項)、台地および台地間の谷津が住宅地化した流山市おおたかの森公園周辺(第2項)、船橋市の船橋ヘルスセンターと谷津遊園および東京ディズニーランドなどの臨海部(第3項)の都市化が扱われている。各項では、様々な地形環境の地域が都市化の波を受けて大きく変化した様子を把握でき、そこから課題を探る発展学習も提案されている。ただ、説明順序との関係もあろうが、新旧地形図の左右配置が項の間で統一できていないのが少し残念である。ESDを扱うのならば、国連SDGsへの言及も欲しかった。

これらに続く第4項と第5項では、執筆者の勤務先での地域調査の実践例が示される。第4項では、主に市川市と千葉市花見川区が扱われ、第5項では佐倉市が取り上げられる。

いずれの場合も対象地域を入れ替えれば、他地域で活用できる提案がなされている。生徒たちが取り組む課題の例も両項で明示されており、他地域で同様の調査をする際に授業設計で大いに活用できるだろう。

ところで、本書末尾の「編集後記」には、本書のコンセプトが2点記されている。それは、①歴史や公民の先生方に読んでもらうこと、②地理の若い先生方に読んでもらうこと、以上2点のシンプルながら芯の通ったコンセプトである。人数の少なさをゆえに校内で情報や実践例の共有を図り難いのが、教育現場における地理の弱点である。「地理総合」の必修修化に伴って歴史や公民を専門とする教員が「地理総合」を担当する機会も増えることだろう。こうした地理を専門としない教員の間にも本書が普及すれば、高等学校における地理の裾野拡大とボトムアップが同時に実現できる。他の都道府県で地理教育をリードする先生方にも、ぜひ本書を手にとっていただき、同様の知識・技術の共有システムの構築や伝承が実現することを期待したい。

(香川貴志 記)

参考文献

- 1) 青木賢人(2020)「ツイッターで注目を集めた階級区分図—令和元年台風15号による千葉県の停電状況—」、地理、65(1)、12-19。
- 2) 池田 碩(2019)「超大型台風19号が襲来したオリンピック開催地・東京都とその周辺」、地理、64(12)、78-81。
- 3) 関 信夫(2020)「墓石も倒れた! 台風15号による谷津田の集落の被害報告」、地理、65(1)、20-25。
- 4) 早川由紀夫(2020)「令和元年台風15号による千葉県南部の風被害」、地理、65(1)、口絵④-⑩。
- 5) 平井史生(2020)「令和元年台風15号の暴風被害」、地理、65(1)、4-11。